令和元年度第２回「医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会」を開催しました！

令和元年度第２回『医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会』を 10 月 30 日(水)に総合市民会館山の都アリーナにて開催しました。第２回目は西地域包括支援センター、北西地域包括支援センター及び北東地域包括支援センターの支援エリアに所在する医療機関、介護保険サービス提供事業所等を中心に、207 名の方にご参加いただきました。

進行役　兼
事例提供者
久田　美佐子　氏

進行役
上村　盛太郎　氏

進行は西地域包括支援センターの久田美佐子氏と北東地域包括支援センターの上村盛太郎氏、話題提供は山梨県中北保健福祉事務所の飯島俊美氏、事例提供は兼任で久田氏に務めていただきました。

話題提供者
飯島　俊美　氏

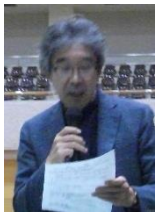
話題提供では、「想いのマップ」の目的や内容をご紹介いただくとともに、活用事例を挙げながら「胸に秘めた想いを文字にして書き出すことで、本人・家族・支援者間の認識の差異を減らし、最期まで療養者の意思を尊重した支援を提供できること」についてお話しいただきました。

その後の座談会では 28 グループに分かれ、事例設定として「病院から自宅に帰ることを望む終末期の療養者に対し、その方の想いをかなえるために自分の職種ができる支援」について、専門性を活かしながら、多角的な意見交換を行いました。

様々な職種で構成されたグループ内では、対象者の生活状況や周囲との関係性も踏まえた上で、対象者の中にある「想い」を最大限叶えるための支援や連携について、熱心に話し合いました。

交流会中盤の発表の時間では、どのグループも時間いっぱいまで積極的に発言を希望し、会場内が大いに盛り上がりました。

発表者からは、「療養者や同居家族の不安を取り除き、ADL のみならず QOL を上げられるように関わりたい」、「終末期のため、自分の職種だけではネガティブな支援に偏るので、他職種と連携し、ポジティブな支援を取り入れたい」、「子である現役世代の家族介護者にも目を向けて、支援制度を紹介したい」など、職種ならではの見地から生じた意見を多くいただきました。

交流会終盤には参加者を代表して、理学療法士・医師・歯科医師の方から、交流会の感想をいただきました。「他の職種がチーム支援の主軸となる場合でも、自分の職種が出来ることや役割について、意識して考える機会となった」「診療の中でも多職種とのコミュニケーションの大切さは感じている。専門職が忌憚のない意見を交わしながら、患者にとって一番いい方法を探ることが日常的に必要である」「この交流会も回を重ねるごとに職種間の垣根が低くなり、お互いの立場を理解したことでスムーズに連携しやすくなった。想いのマップの話題提供をはじめ、今回も多くのことを学び得ることが出来た」などの感想をいただき、交流会は盛会のうちに終了しました。

交流会の様子を掲載します！